

中国雲南省緑春県牛孔郷のイ族における 年中儀礼と祭祀の調査研究

楊六金*

牛孔郷は雲南省緑春県の一つの郷であり、牛孔郷のイ族は牛孔、土嘎、貴龍、納卡の四つの大きな村落に居住している。付近には白勸谷、曼洛、阿谷、巴谷、莫蘇、仲明などの幾つかのイ族の小村がある。彼らはネスポ^{ne³³ su⁵⁵ pho₂₁}と自称している。この4つのイ族の大村は、イ族が集居しているため、外の民族の文化の影響が比較的少なく、そのためいうまでもなく言語や文字、

宗教信仰、年中儀礼など今に至るまで民族的特色を色濃く残している。以下に緑春県牛孔のイ族ネスポの年中儀礼と祭祀の調査報告をする。

I 泉の若水の奪い合いと年始回り

1. 若水を奪いあう

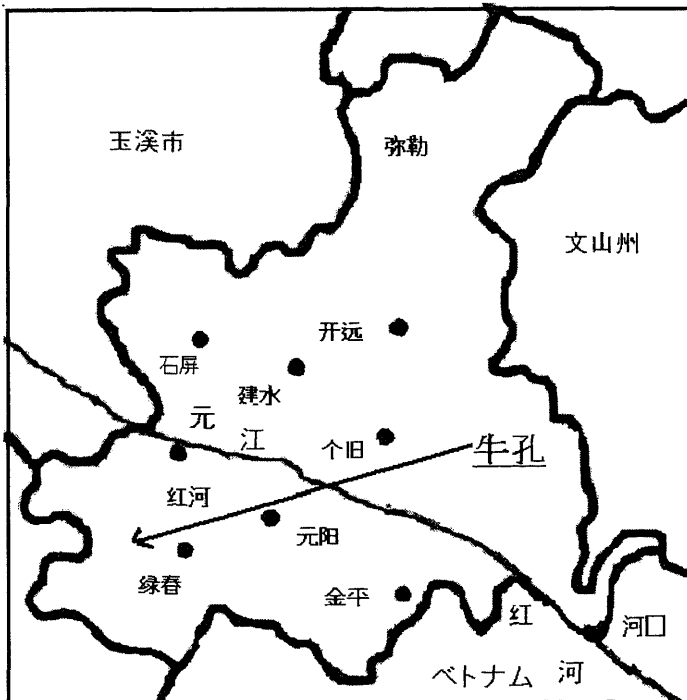
正月の第一日、空がだんだん明るくなるころ、男たちはたいまつを持って、泉の若

水を、先を争って奪い合う。泉の水を使って湯圓を作り、祖霊を祀り、祖先に一家全員の新年の平安と豊作を祈る。この祭祀活動は最初から最後まで男子のみが行う。最初に奪った水には最も霊気があると言いつたられている。

2. 年始回り

正月の第一日、各家の祭祀が終わわり、朝食を食べ終わった後、母屋に飴や落花生、バナナなどを用意する。色とりどりの服を子供たちに着せて年始回りが始まる。これは子供たちにとって最も楽しいひと時である。子供たちは大人たちが起きるより一足早く起

床し、新しい衣装に着替え、わくわくしながら空が明るくなるのを待つ。女の子たち



*雲南社会科学院红河民族研究所副所長（副教授）

は更に昂揚して、空がまだ明るくならないうちから友達を誘いに行く。けれども、母親たちは女の子たちを美しく着飾った後、微笑みながら彼女たちに「家に入る時は、男の子たちの後ろにつかなければ駄目よ。そうしないと家の人は腹を立てて、あなた方に豚にやる水をかけてしまうかもしれないよ」と戒める。女の子たちはこの話は聞いているけれども、今のところ誰かの家の子が豚にやる水をかけられたという話は聞いたことがない。子供たちの目には、貧富の隔てなく、村の上から村の下まで、家々に年始回りに行く。年始回りのやり方はごく簡単で、母屋に入り、主人が敷いたむしろか松の葉の上に跪き、祖先の位牌に向かって一礼し、それが終わって後に主人に両手でおみやげを頂き、また別の家に行く。みやげは多かったり少なかったりはするものの、どの家でも与える。すべての家で一族の各家ではいくらか贈り物をするが、親戚の家に当たると、更にゆで卵、ビスケット、餅などが贈られる。子供たちは朝にはたくさんのおみやげをもらい、一ヶ月くらいそれを食べることができる。伝えられるところ、正月の一日に、村の子供たちが家に年始回りに来ないと、その年は災禍に会うという。それゆえ、家々はみな年始回りに来ることを歓迎する。

II 出門, 村門祭祀, 村神祭祀

1. 出門 ドドゥ do₂₁ du₂₁

イ語ではドドゥといい、「門を出る」という意味である。村の中のこの儀礼の参加者は春節の後のある吉日を選び、村から比較的遠い一箇所の草地を選ぶ。村中の成年男

子（老人たちは一般に参加しない）は鉄砲^{訳注1}を担ぎ、モチを持って草地に行く。男の子は連れて行ってもよく、その日、大人は子供たちに特別にお金を入れたものを持たせる。これは門から出ることを意味する。それによって子供たちが働き者で勇敢な性格に育つように意識的にそうするのである。正午頃、人々が揃ってから、みんなで体格がよく壮健で品行のよい一人の青年を選出する。彼を百メートルほどのところに行かせて、指四本幅の木で作った的をそこに置く。この的は彼の身代わりである。その的めがけて鉄砲を撃つが、その場に参加した成年男子はすべて参加してよい。弾が当たったら、的を守る人の命は短いとされ、その場に参加した人は金を出し合って鶏を買い、彼のために魂を呼ぶ。反対に、的に命中しなかったら、彼の命は長く、逆に村の安寧を脅かすとされ、その場の参加者は金を出し合って村全体のために魂を呼ぶ。この活動には的を守る役の人には勇敢で献身的な精神が必要とされる。それゆえ、的に当てられると、村にはその年の平穩無事が約束され、的を守る人にいわせると、彼は自分の大切な「命」を村人のために捧げたということになる。

2. サチエドゥ (村門の祭祀) sa³³ tje³³ du₂₁

イ語ではサチエドゥといい、「村門の神を祀る」という意味である。春節の後の最初の子の日^{訳注2}の昼ごろ、祭りの主催者は7～8名の老人を連れて、供物（主なものは2

^{訳注1} 火縄銃で1.5メートルほどのものが一般的である。

^{訳注2} 当地のネスの人々は農曆を使用しており、十二支も漢族と同じである。

羽の雄鶏と酒)を持って、外から来る人の往来の多い道で、鶏を殺し祭祀を行う。1本の草縄を道路の両側の大きな木に高々と掛け、真ん中に竹ひごで作った1羽の「鷹」^{訳注3}を付ける。鶏の頭と羽毛を「鷹」の上に括り付ける。邪悪なものや災難が入って来ないように、村びとが平安無事で健康でありますようにという意味である。

3. ズィツァロハ (泉の祭祀) zi₂₁ tsa²¹

lo³³ xa₂₁

村門の祭祀の午後、さらに「泉の祭祀」が行われる。これはイ語ではズィツァロハという。主要な供物は1羽の雄鶏と1羽の雌鶏である。祭祀の前にチガヤを縛って作った草縄を泉の傍らの神樹の上に12周巻きつける(毎年同じ大樹の上である)。続いて、泉の周囲の枯れ枝や枯葉を清掃し、泉を整えた後、鶏を殺して捧げる。これは井戸神に、井戸の水が常に流れ途切れないように祈っていることを表している。

4. ミガハ (村神の祭祀) mi⁵⁵ ka₂₁ xa₂₁

イ語ではミガハといい、「村神を祀る」という意味である。時期は春節の後の第一の丑の日である。ミガハはイ族の山村で最も重要で、厳粛な祭祀である。まず、司祭は前年に村神の神樹の下に埋めた一つの円形の石を取り出し、それを洗った後、神樹の下に置き、豚を殺して祭祀をする。伝え聞くところ、もしもこの円形の石が丸くすべすと光っていたら、その村には美しい娘が生まれるという。この日の早朝、女性たちはモチをつき、飾の上に大小のモチを丸めて並べ、その上に豚の血を塗り、様々な

^{訳注3} 鷹は外部の悪霊から村を守る象徴と考えられている。

色の菜の花を挿す。正午の頃、男たちの頭の上にモチを載せて村神の樹の下にモチを運ばせ、その年の天候の無事や五穀豊穡などを祈り、祭祀を行う。この祭祀に参加するのは一律に男性である。この日の晩から女性たちは年の上下に関係なくみな草地へ行って豊作の踊りを踊る。踊りは農業を模したもので、種まき、田植え、草取り、脱穀、粃の運搬など一続きの農業活動の過程を示し、イ族人民の労働に対する愛情、生活に対する感情や思想を表現している。すべての人々は昼間の仕事で疲れていても、晩になれば皆集まり、踊る者あり、にぎやかさを見物する者あり、太鼓が止むまでそれは続くのである。

5. ズミルダ (持ち寄りの宴会) dzi³³ mi⁵⁵

lu³³ da₂₁

イ語ではズミルダといい、「美味しい酒を飲む」という意味である。これは持っている者は多く出し、持っていない者は少し出すというような持ち寄りの宴会であることを指し、時期は毎年春節の後の最初の寅の日である。村中の老若男女を問わず参加し、年齢に応じて持ち寄りの宴会をする相手と約束し、青年はお互いに約束し合い、人数に制限はない。金を出し合って豚や鶏を買い、村の外で煮て食べる。子供たちの持ち寄りの宴会は一般に男女が分かれ、少ないときには6人多くて10人が、毎年東の当主になり、数人が東の当主の家で宴会を行い、東の当主は毎年順番に替わる。少年や子供の宴会は金を出し合って物を買うことが主で(米、肉、魚、卵など)、物品の種類や数量に限りはない。例えば、魚2匹、卵2個、モチ2個、米1碗などである。嫁に行った

娘も里に帰って宴会を続けてよく、興味深いことに嫁に出て子供を背中に背負っている娘とまだ嫁に行っていない娘とが宴会をしていることがある。この日、村はとてにぎやかで、友好的な雰囲気満ちている。人を招いた主人は、とても忙しく、一日中飲んだり食べたりして過ごす、これは彼らが心から望んでいるもので、多くの人々は客人のために予想より多くの菓子や果物を用意している。

6. メセブ (火の神の祭祀) me³³sɛ₂₁p³³

イ語ではメセブといい、「火の神を祀る」という意味である。時期は毎年春節の後の二番目の辰の日である。村の中の各家はみな金を出し合い、*ビマ*p³³ma₂₁と数人の老人は豚と鶏を買って供物とし、村から約4キロのところの水路の傍らを祭祀の場所と決める。この場所は毎年変わらない。祭祀が終わった後、司祭は供物(豚肉)を各世帯の代表に分配し、各人は米飯と食器を持参し祭祀場所で食事をとる。

食事が終わって、ヨモギの枝で各種の食器類を洗うが、供物や食べ残しは持ち帰ってはならない。火の神の祭祀の目的は、災害や邪悪なものから免れるように火の神に祈ることである。

Ⅲ 端午節と松明祭り

1. ブハ 土地祠の祭祀 bu³³xa₂₁

イ語ではブハといい、「土地祠^{註4}を祀る」という意味である。時期は毎年旧暦二月二日である。土地祠は一般に村の一番高い場所にある。その日は各家で金を出し合い豚と鶏を買い、村のなかで徳の高い長老たちが祭祀を取り仕切る。村の中のどの家も

もちろん自分で供物を準備し、土地祠の祭祀を行うことができ、これらの供物(一般に一卓の飯とおかず)を跡継ぎのある老人がその場所で用いる。これらは徳を積み、心を良くするというを表す。

2. ゾトト dzo₂₁th³³th³³

イ語ではゾトトといい、「粽を包む祭り」という意味である。時期は毎年旧暦の五月五日である。粽の形は三角のものもあれば円形のものもある。言い伝えによると「粽の祭り」は春秋戦国時代の英雄屈原を記念して行われる。屈原は、汨羅江(べきらこう)に入水自殺した。イ族の祖先たちは彼の死体を捜し、最後に河の曲がったところで彼の脛骨^{註5}を見つけた。イ族の祖先たちは粽を包み、丸く長く(約一尺)して屈原の脛骨に似せた。こうして屈原を記念しているのである。

3. メチャツ たいまつ祭り me³³ts³³tshu⁵⁵

端午節の二日目、たいまつ祭りが始まる。イ語ではメチャツという。これはスポーツ性と娯楽性を具えた年中行事である。たいまつには一律にヨモギの枝を乾したものをを用いる(イ族はヨモギの枝を清純な植物と考えている)。若い娘たちが一ヶ月前の農作業の合間に山に行きヨモギの枝を取って乾す。それらを家に持ち帰った後、それら

^{註4} 原文は「土地廟」となっていたが、緑春では一坪ほどの広さであるという。大きさはまちまちであるが、漢族の「廟」といった大きさの建物ではない。中には像を祀るものや自然石などを祀るものなどがあるという。

^{註5} ふくらはぎの内側の太い骨

を大小それぞれに束ねておいて、薪を乾す棚の上に置いて乾す。たいまつは娘たちの知恵と力の象徴で、相手の感情を引きつけようとする贈り物である。それゆえ、成年の娘たちは自分の気力を惜しむことなく、大きなたいまつを作り、気持ちをたいまつの中に深く込める。こうした準備作業には父母やキョウダイも文句を言わない。

お祝いの活動の中では、厳格な道徳規範がある。青年女子はたいまつを青年男子の胸にむけて持って行ってはならない。また、たいまつを故意に大きくして青年男子に火傷をさせてはならない。青年男子は石や棍棒でたいまつを壊してはならない。たいまつを奪い取ることは更にいけない。習慣によると、男子たちがたいまつを消した後、娘たちがまたたいまつに火をつけることになっている。たいまつ祭りは13日の間ずっと続けられる。

4. チュラ (魂を呼ぶ儀礼) tshu₂₁ la₂₁

イ語ではチュラといい、「年の中ごろに魂を呼ぶ」という意味である。時期は毎年旧暦の五月十三日である。その日は村の中で一頭ないし二頭の黄牛を殺し、儀礼の参加者によって肉を各世帯に均分に分配する。牛肉の他に、鶏も殺し、紫や黄色に染めたもち米のおこわを炊いて供物とする。魂を呼ぶ時、一家は各自一式の服の飾りをピマ pr⁵⁵ ma₂₁ に差にし出さなければならない。男は帽子を、女はターバンなどの飾りを持って行く。魂呼びは、生まれた年の古い者から年齢順に呼び出す。ピマの魂呼びは、報酬を取らないが、いずれかの家で一緒に一食ご馳走になってもよい。

晩の時分になって、各家々ではたいまつ

を灯し、食器を運ぶ盆を叩き、祖先を送り、邪を除く。また、五月の端午節に腕や首に巻いた赤や緑の糸を焼き払う。これによって魔を除け、病を除き、村の安泰と来年の作物の豊穡を祈る。

IV チェシゾゾ (新米祭り) とフプベ (米あられ祭り)

1. チェシゾゾ (新米祭り) tʃhe₂₁ ʃi₂₁ dzo₂₁ dzo³³

イ語ではチェシゾゾといい、「新米で作った飯を食べる」という意味である。時期は不定であるが、毎年秋の、河谷の稲が黄色く変わるころ、イ族の山村では旧暦7月の戌の日の一つを選んで「新米の飯を食べる祭り」を行う。その日は各家々では田んぼの稲穂をいく束か持ち帰り、米を乾煎りしてあられにした後、新米を取り出し去年の米と一緒に煮る。家々では鶏やアヒルを殺し、穀神に祀り、食事の前に犬に供物の一部を分け与える。伝説では、大昔、稲は地を覆うほど大きく、米粒はお碗ほどの大きさであった。人々は食べるに困ることはなく、着るものに不自由することはなかった。ある日、ある家の子供がおなかをこわし、米を踏みつけてしまった。この子供の母親は米を大事にするような気持ちはなく、逆に米を子供の尻にこすりつけた。天神はこれを知ると、人間界から米を取り戻した。人々は食べることができず、着るものもなく、飢えてやせ衰えていった。犬も飢えに耐えられず、狂ったように毎晩吠えた。天神はこれを知ると、人に罪はあっても犬にはないので、かわいそうに思い、いくらかのくず米を犬に食べさせた。これが米の由

来であって、人々は犬の功労に感謝し、毎年新米の飯を食べるときはまず犬に食べさせてから人が食べるようにしているのである。

2. フプベ (米あられ祭り) xu₂₁ pu³³ be³³

イ語ではフプベといい、「米あられを作る」という意味である。毎年旧暦七月二十四日である。その晩は家々ではパンパンという音が鳴り止まないが、これは爆竹ではなく、米あられを作る音なのである。伝え聞くと、大昔イ族は低地に住んでおり、そこは魚と米の豊かな美しいところであった。ある年、やっと田の苗の芽が出た頃、突然に外の民族が侵入してきた。首領のアロは群衆を率いて抵抗したが、数不足で相手にならず、彼らは敵に破れた。彼らは攻撃しては敗退していき、最後には高く険しい山の上まで撤退した。山は険しく、攻め守るにはよいが、樹がなく水もない。三日もたたないうちに持ってきた水を使い果たし、四方を強敵に囲まれ首領は打つ手を失った。首領は何晩も苦慮を重ねたが、敵を追い払う妙案は考えつかなかった。ある早朝、氏族の全員を招集し状勢をみなで分析した後、もしも誰か妙案を考えたら、氏族全体を守るべく、その者を首領として推挙し、立てこもりを止め、自分の娘を妻としてあてがうこととしようと言首領は宣言した。しばらくして、群衆のなかから一人の美青年が出てきた。彼の名はザドといい、氏族のなかの弓の名手であった。彼が首領に耳打ちすると、首領はうなずいて褒め称えた。その晩から彼らは連夜にわたって十数袋の米あられを作った。二日目の頭上から強い日の光が降り注ぎ、まったく風のない真っ昼間、

山の上に人を集めて、軍馬を囲んで、竹筒、盆、鍋などを使って米あられを馬の体に雪のように真っ白な水しぶきのように付けた。敵は遠くからこの情景を見て、彼らがまだ食糧や水があると思って、太鼓を鳴らして撤退した。イ族の氏族はこうして生き延びることができた。首領は前の決定のとおり、ザドを首領に推挙し、自分の娘を娶らせた。ザドは知恵で敵に勝利し、その名声は轟きわたり、イ族の英雄となった。ザドの誕生日(旧暦七月二十四日)はこれを記念し、米あられを作る。それからというもの、イ族の米あられ祭りは子々孫々に伝えられていった。

V ツァラ (年越し) tsa³³ la₂₁

イ語でツァラといい、「年越し」という意味である。時期は旧暦十一月十三日にツァラ祭りが開かれる。その頃は冬の真っ只中であるが、イ族の山は桜の花が咲いていて、まるで天上界のように霞が万緑の森に広がって、人を暖かい気持ちにさせる。その日は各家々で新しい年のために豚を殺す。村でやる儀礼はなく、各家で祖先を祀るだけである。年越しは、新しい服を着るわけでもなく、灯籠を吊るしたりするわけでもなく、客を招いたり客として訪問したりする以外は、二三日塩漬けの肉を作ったり、香肠(中国のソーセージ)を作ったりしているのを見るだけである。飲み食いが終わったら、ブランコ訳注6に乗りに行く。これには次の伝説がある。イ族の間では毎年たくさん豚が年越しの時に殺され、豚はそれを不服に思い天神に訴えた。天神は豚を欺き、彼らにこういった。人はとても残虐なもの

で、私は人が飯を食った後、吊るして殺している。天神は豚に人がブランコをしているところを見せたという。

年越しの三日後、嫁に行った娘たちは美味しい酒と豚の頭を持って里帰りする。これは家の中で豚の疫病が流行って年越しの豚がなかったとしても、金を出して豚の頭を買って里帰りするという意味合いである。これは父母の養育の恩に報いるということである。もちろん、嫁に行ったばかりの娘も、老婦人もこのようにする。豚の頭一つは豚一頭の価値を表している。

以上、緑春県牛孔郷の四つのイ族の主要な年中行事を記述してきた。こうした活動には以下のような特徴がある。

・全員参加 大きな年中行事には概ね、全員が総動員され、家々は金銭や物を寄付する。それゆえこれらは民族全体の根本的な利益を表している。みんなのことはみんなやるという政府の指導的思想にも合っている。また、こうした指導的思想と祭祀活動の挙行には民族の凝集力を増し、集団的観念を培う積極的な作用がある。もちろん、彼らの精霊崇拜は、幻に期待して、肉体や精神の苦痛から逃れたいという荒唐無稽なものである。これは民族経済文化にとっては不利なことであり、容易に立ち遅れた閉鎖的な民族地域的な観念を形成し、他

の民族との政治、経済、文化などの広汎な交流にも不利に働くであろう。

・機能性 彼らは祖先を崇拜し、神霊を崇拜する。この目的は祖先や神霊に自己、あるいは氏族や民族の利益を守ってくれることを祈るということである。動植物の崇拜についても、動植物のある種の特性に、自己や民族の能力を保護することから、自然を征服し民族を発展させる能力を求めているのである。また、こうした祭祀活動を通じて、集団的な利益というものを生じさせる作用がある。例えば、「村神を祀る」ことを挙げると、村神は一つの樹林、あるいは一つの山の樹林であり、みな神のいる神聖性があり、村の人は木を切ったりしないし、切ることも許されていない。これらには明確に、森林保護の作用がある。

・娯楽性 「持ち寄りの宴会」「門を出る」「村神の祭り」「太鼓の踊り」などの活動は明らかに娯楽性がある。例えば「太鼓の踊り」「村神の祭り」の活動で「狩りをする」という場面（祭祀が終わった後、手に豚の蹄をつけ、鶏の爪などを巻きつけるなどして獲物に扮した人が祭祀場で踊り、別の人には叫びながらそれを追っていく）は、完全にイ族人民が持つ激情や彼らの美意識の発露である。

・教育性 「門を出る」「年始回り」「太鼓の踊り」などは明らかに教育性をもった作用がある。例えば、「門から遠くに出る」というのは人々を勤労で勇敢にするよう教育し、民族への献身的な精神を育む。「年始回り」は子供たちが老人たちを尊敬する思想的な品德を育む。「太鼓の踊り」は老人たちが日ごろ、「田植えができなければ、太鼓踊

訳注6 こうしたブランコは古いイ語では lu₂₁ ʔu₂₁ といい、現代イ語では lo⁵⁵ bʔ₂₁ と呼ばれている。このブランコはハニ族のところでもよく見られるものと同様なもので、4本の丸太を組んでその頂点の部分に環を吊るし、そこにブランコの紐を掛けるという形態のものである。

りを学べ」というように明らかに農業労働の教育である。民間文学^{訳注7}のほうからいうと、また芸術や美意識の教育作用も潜んでいる。例えば、「米あられ祭り」は関連する伝説で、民族英雄主義への賛美であり、同様に一定の教育的作用がある。当然、彼らのある種の伝統教育のなかの精霊崇拜に対するもののなかには、現代の教育に対して、

民族の発展上多くの不利で消極的な要素がある。しかし、この種の民族精神の教育方法には学ぶべき点がある。

*訳注は本人との対話により訳者がつけたものである。

(稲村務訳 琉球大学法文学部助教授)

^{訳注7} 中国では神話伝説、諺、謎などの口頭伝承も含める民間の人々による創作（小説、随筆、詩などのまったくの創作も含む）一括して「民間文学」と称している。特に少数民族の神話、伝説などの口頭伝承は漢訳の形でここに含められることが多い。

新刊紹介

楊 六金 著

『莽人的过去和现在 十六年跟踪実察研究』

莽人（自称マンman）は雲南省紅河州金平を中心に中国領内では651人（2003年現在）のモン・クメール系の言語を話す未識別の民族的集団（著者は「族群」としている）である。1950年代に定住化が進められたものの、元来は狩猟採集と焼畑を生業としていた。著者の楊六金氏が16年にわたって、断続的に調査研究を進めてきた集団であり、本書はそのまとまった民族誌としてきわめて学術的な意義のある著作である。ベトナム北部においてもマンと呼ばれる人口2300人は

どの民族的集団が知られており、楊氏も比較研究に着手しており、ベトナム少数民族の研究者にも比較資料として重要である。中国における民族識別はジノ一族（1979年）以降、一つの「民族」も公認されていない。本書は現代の民族識別のあり方について、単に政治史的な分析ではなく、現場の具体的な状況について興味のある人にも民族誌の側からの資料として一読されることを薦めたい。

(稲村務)

云南教育出版社 2004年1月刊